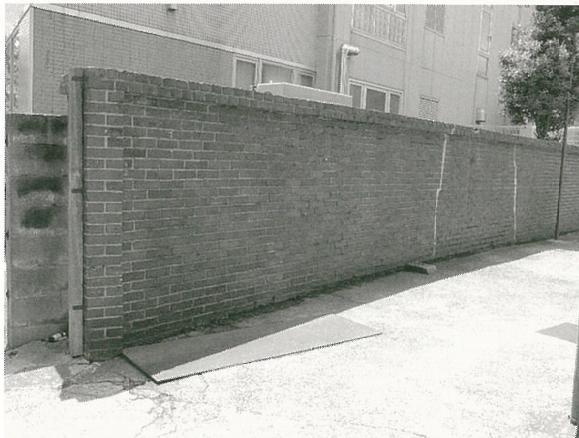


文化財  
NEWS速報

# 発見！ 尾久産の煉瓦 —山本煉瓦工場の痕跡—



佐藤病院の煉瓦塀



刻印①

刻印②

**荒川ふるさと  
文化館だより**

荒川区教育委員会  
荒川ふるさと文化館  
荒川区南千住6-63-1  
TEL 03(3807)9234  
登録(22)0054号

荒川区と煉瓦 荒川区には、歴史的な煉瓦造りの建造物があります。旧千住製錬所煉瓦塀やあらかわ遊園付近の煉瓦塀など

が代表的なものです。旧型店舗東側の煉瓦塀が、南千住6丁目の大型店舗東側の煉瓦塀が、代表的なものです。旧

千住製錬所煉瓦塀について、南千住6丁目の大型店舗東側の煉瓦塀が、南千住6丁目の大型店舗東側の煉瓦塀が、

平成21年度区登録文化財となり（『荒川ふるさと文化館だより』23号）、今年10月初めに保存整備事業が完了しました。

ところで、荒川区に煉瓦工場があつたことは、あまり知られていないようです。かつて尾久には石神煉瓦工場をはじめ、鈴木・山本・広岡・戸田という煉瓦工場がありました。広岡工場については以前、あらかわ遊園の前身であるということをお知らせしました（『荒川ふるさと文化館だより』18号）。今回は山本煉瓦工場について、その存在を今につたえる煉瓦塀を中心のご紹介します。

尾久の山本煉瓦工場 山本煉瓦工場（『新興の尾久町』では山本煉瓦製造所）は、起業家で尾久の町会議員も務めた山本要蔵が明治31年（一八九八）5月に設立した工場で、北豊島郡尾久村字上尾久付近（現在の東尾久7丁目、株ADEKA研究所付近）に所在したそうです。

尾久の煉瓦工場が設立されたのは、明治初期にできたといわれる石神工場を別にすると、鈴木（明治30年）・山本（同31年）・広岡（同33・36年両説あり）・戸田（同38年）と、明治30年代であり、この時期から尾久の煉瓦作りが盛んになつたといえます。

国内の煉瓦需要は、煉瓦造建築や鉄道工事の増加をうけて、明治20年代半ばから同30年代にかけ

て、景気の影響を受けつつも増加していくようです。

山本煉瓦工場などが尾久に設立されたのは、こうした增加する煉瓦造建築の需要に支えられて、煉瓦生産が盛んになっていった時代のことです。

## 山本煉瓦工場の刻印を発見

煉瓦には、製造所を示す刻印が押された時代がありました。これによつて、その煉瓦がどこで作られたのかが大体判別できるのです。が、尾久の煉瓦工場の刻印については、その文様の形がどうなっているかによって、はつきりと確認できる資料はありませんでした。

ところが先日、偶然にその痕跡を発見しました。それが、西尾久5丁目にある佐藤病院の煉瓦塀です。この煉瓦塀が山本工場製だという指摘は以前からありました（大山せいし『屋久町屋あれこれ』）、はつきりとした確証は得られていませんでした。

ところが、今年度の地域史講座のフィールドワークで、この煉瓦塀を調査したところ、「山本」の刻印を発見したのです。ただし、刻印①の「山本」の刻印は、愛知県半田市に類似の刻印を使用する業者があつたといわれ、これだけでは山本工場製と断定はできませんが、別の箇所の煉瓦に「山本」とはつきりと銘記されたものがありました（刻印②）。これによつて、この煉瓦塀が山本工場製煉瓦を使用していることはほぼ間違いないといえるようになりました。

このように、まちかどの風景の中にも、荒川区の近代産業の痕跡を残す歴史的な資料が隠れています。みなさんも是非、地域の歴史を探してみてください。

今年度のふるさと文化館第2回企画展（2～3月）では、煉瓦をテーマとした展示を行います。尾久以外の煉瓦建造物もご紹介しますので、ご期待下さい。

【参考文献】 水野信太郎『日本煉瓦史の研究』（法政大学出版局）、日本煉瓦株式会社『日本煉瓦一〇〇年史』  
（齊藤照徳）

タ イ ハ ト ジ ネ ル ス®  
あらかわ遊園再建

— 総合的な荒川の名勝としての  
児童遊園地をつくりたい —

ご存知、あらかわ遊園。昭和 16 年（一九四一）に高射砲陣地となり、一時荒廃したものの、同 24 年にまず児童遊園として再建され、翌年、東京都の都市計画公園となつて、区立の遊園地としての歴史を歩み始めた。

その遊園の図面が、東京都公園協会に残つている。昭和 23 年、同 24 年、同 26 年の三図あり、23 年図と 24 年図は、「荒川遊園計画図一／三〇〇」というタイトルをもつ。再建計画を記した図面だ。動物園、科学遊園、お伽の島、自由芝生、児童遊園、子供会館等の文字がみえるが、子供会館の部分には、上から野外劇場のような図が描かれた紙が貼られており、24 年図には張り紙の図が書かれている。計画変更があつた訳だ。その他花壇、ブール、徒歩池、ボート池、噴水、回転ボート、スクーター、飛行塔など遊具類、売店、喫茶食堂、便所、野外卓、ベンチなどの設備が書き込まれている。計画図だけに、「幻の遊園」ともいえようか。

とはいものの現実となつた設備・施設等も少なくない。26 年図から作成した表のとおりである。この図は青焼き図面で、管理用の図面として使用されたものと思われるが、開園当初の遊園の現実がここに記されているといつてよい。



荒川遊園計画図



ところで、こうした施設が計画されたのはなぜか。当然、戦前からあつた土地・設備を転用したであろうことは想像に難くない。だが、当時の田中中国男区長は議会で「文化的に復興させるため健全なる緑地帯は必要なので、公園施設は是非とも充実したい。とくに荒川遊園は規模も大きく、荒川区民は勿論城北一帯の人びとが利用できる遊園地であり、ここに総合的な荒川の名勝としての児童遊園地をつくりたい」（『荒川区議会史』本編）と発言をしている。また、

開園当時の区勢概要には、「主として児童を対象とした総合遊園として」発足し、「将来は城北における唯一の楽天地とする計画のもとにいまだ建設途上にある」と謳われている。

要するに、もともと子ども向けをコンセプトとした再建案だったのだ。その後もこの方向で、順次新たな施設を充実させていく。



昭和 23 年「荒川遊園計画図 1/300」（公益財団法人東京都公園協会蔵）

（亀川泰照）

施設・設備等一覧 (昭和 26 年 6 月段階)	
設備	道路 下水溝 建物 樹木 法敷 水道 下水栓 コンクリート橋石積 鉄鋼柵及門 水道及下水路 電灯 動力引込線 消火栓 鑿井唧筒 音響施設
施設	水呑場 売店 無料休憩所 十一重塔 遊園神祠 自由広場 W.C.(図中に記載) 子供プール 大人プール 池・鯉飼育 共同畜舎 猿舎 栗鼠舎 ヤギ舎
遊具類	豆汽車軌道 回転塔 二重シーソー 三人乗ブランコ ユリカゴ 遊動円木 コンビネーション スペリダイ 飛行塔 回転象乗 スワンボート乗場 ボート乗場 ボートハウス 豆自動車滑走路 ロータリーチエヤー

「荒川遊園平面図 1/600」  
(公益財団法人東京都公園協会蔵)



田中清介さんの総火造りの様子

田中さんの父・茂吉氏は、安藤入道盛房系の北千住（足立区）の「盛久」で修業を積んで独立し、その後、現在地の町屋に仕事場を構えました。田中さんは、号を「茂盛光」と名乗った父のもとで修業して技術を修得し、その系譜を受け継いだ二代目なのです。

## 職人 ⑥ 人

### 金切鋏

刀鍛冶の技術の系譜を引く見事な総火造りの実演を見せてくれる田中清介さん。田中さんは金切鋏をつくる職人です。赤く熱した鋼を打つて鍛接して刃を打ち上げる様子は迫力があります。

田中さんの作品は、荒川ふるさと文化館で今年の4月24日から5月23日まで開催した「速報！あらかわの文化財展」でも展示了しました。

金切鋏とは 金切鋏とは板金を切るための鋏で、板金加工をする職人さんなどのための専門用具です。

刃の形だけでも直刃、柳刃、エグリ刃といった種類があり、それ以外に大きさ、刃の素材の組み合せによって、その種類は数十種類にのぼります。

金切鋏職人の系譜 起源は明治時代初めに遡ります。武士の時代が終わり、廃刀令で帶刀が禁止されるなか、刀鍛冶の職人は、刀以外でその技術を生かす方法を模索しました。そのようななか、刀鍛冶だった安藤入道盛房と矢矧芳松が総火造りで刃を鍛接する技術を生かして、金切鋏の製造に発展させたとされます。その後、安藤入道盛房の系統は「盛久」を

時代の流れのなかで 金切鋏は、板金加工の職人の道具として長い間、重宝されてきました。

その一方で、時代によつては、今では思いつかないような用途もありました。日露戦争では、陸軍発注の備品として「鉄条鋏」が確認でき、戦地の鉄条網を切断し突破するためにも金切鋏が使われていたことが窺われます。

また、時代のニーズに合わせた素材の改良もみられます。旧来からの金切鋏はトタン・ブリキ板の切断を想定したもので、刃には炭素鋼という素材を用いていました。しかし、昭和30年頃になると、ダインギングキッキンの流し台にステンレス板が使われるなどステンレス需要が一気に拡大し、板金工からも「ステンレス板の加工用の金切鋏がほしい」という要望が高まりました。そこで、従来、刃に用いていた炭素鋼よりもステンレス板の切断に適した素材・特殊鋼でも金切鋏を製造するようにして、広がる板金工のニーズにも応えてきました。

近年は、板金切断の道具としてレーザーカッターやエアカッターなどの機械が出回り、金切鋏 자체を使いこなす板金工も減つてきているそうです。板金工からの需要が減つたこともあり、以前は都内の金切鋏製造業だけで組合ができるほどあつた同業者も徐々にやめていくつてしまい、現在、都内で技術を受

「あらかわの伝統技術展」で例年、刀鍛冶の技術の系譜を引く見事な総火造りの実演を見せてくれる田中清介さん。田中さんは金切鋏をつくる職人です。赤く熱した鋼を打つて鍛接して刃を打ち上げる様子は迫力があります。

田中さんの父・茂吉氏は、安藤入道盛房系の北千住（足立区）の「盛久」で修業を積んで独立し、その後、現在地の町屋に仕事場を構えました。田中さんは、号を「茂盛光」と名乗った父のもとで修業して技術を修得し、その系譜を受け継いだ二代目なのです。

中心に都内で、矢矧芳松の系統は「久光」を中心抛点を館山（千葉県）に移して、技術が継承され広がつていきました。

田中さんの父・茂吉氏は、安藤入道盛房系の北千住（足立区）の「盛久」で修業を積んで独立し、その後、現在地の町屋に仕事場を構えました。田中さんは、号を「茂盛光」と名乗った父のもとで修業して技術を修得し、その系譜を受け継いだ二代目なのです。

田中さんの金切鋏の技術は荒川区指定の無形文化財となりました。荒川区では「伝統に生きる」という伝統技術の記録映画を制作しており、今年度は田中さんの技術を映像化する予定です。

（澤田善明）  
ご期待ください。



金切鋏各種  
直刃（写真上）、柳刃（写真中）エグリ刃（写真下）



①の胎内像

③の胎内像

（南千住六丁目）に、夥しい数の吉いお雛様が飾られた。その中に、他の人物形に比べてもさらに古そうな大黒天と恵比須様が置かれていた。蝋燭屋を営んでいた南千住の旧家に祀られていたもので、改築に当たりお雛様と一緒に納められたのだそうだ。

**天保2年子月の墨書** 像は3体。一对と思われる恵比須（①）・大黒天像（②）とやや大きな大黒天像（③）からなる。③の台座裏面に天保2年（一八三二）の「天保二子ノ月初子日」自々斎条一舟作 花押（朱）という墨書が確認された。子月とは、旧暦11月の異称である。『東都歳事記』によれば、各家では子月の初子日に赤小豆飯等を供え、大黒

天にはネズミと大黒天の関係は深い。大黒天にはネズミを従えさせる力があるとか、大国主命がネズミに救われたという神話から、ネズミは大黒天のお使いとされるようになつたという考え方があり、背景にあって、甲子祭や子祭に結びついていつたと考えられている（『江戸歳時記』）。

**胎内から大黒様** それぞれの像の台座を外すと、各像の胎内から小さな像が現れた。①は頭巾を被り、顎鬚を蓄えた顔、②③も頭巾を被っているが無精ひげのようなものが描かれている。①は恵比須の顔だが、鳥帽子ではなく頭巾を被つており、大黒天を意識して、または大黒天と習合させて表現されたと思われる。3体とも背部から見ると男根のような姿をしているのが特徴である。大黒天は、古代インドでは摩訶迦羅（マハーカラ）という戦神だが、シヴァ神が変身したもので性神的な性格を持つとも考えられていた。日本

では、福德豊穣を願う人びとから信仰を受けるようになり、その後、豊穣のシンボルとして男根になぞらえた大黒天像が登場する。この胎内像もその事例の一つと思われる。

胎内像の底には「肝心脾肺腎」五臓を現す文字が書かれ

## タケシのわ タケシトシナレバ

### 自々斎条一舟作の 恵比須・大黒様

様の「子祭」を行つたという。また、正月の甲子日と同じく、神田明神・東

叡山護国院・本所大國院など各地の大黒天が開帳され、参詣者で賑わいを見せたもあり、江戸の人びとの熱心な大黒信仰が窺える。

ネズミと大黒天の関係は深い。大黒天にはネズミを従えさせる力があるとか、大国主命がネズミに救われたとい

う神話から、ネズミは大黒天のお使いとされるようになつたという考え方があり、背景にあって、甲子祭や子祭に結びついていつたと考えられている（『江戸歳時記』）。



③の裏面

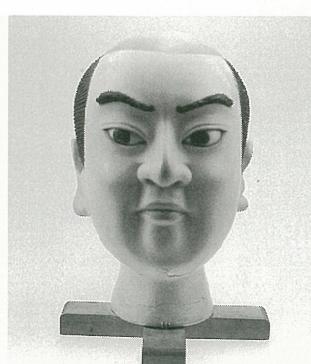


③の胎内像裏面

澤博昭氏によつて指摘されているが（『人形玩具研究』11）、条一舟も人形師であり、木彫も手がけていたことが分かる。これらの像は、著名な人形師の作例として貴重な文化財といえる。このコラムが契機となり、条一舟の作例が発見されるのを期待したい。

（野尻かおる）

**【参考文献】**『東都歳事記』（東洋文庫、一九七六）、宮田登『江戸歳時記』（一九八二）、大島健彦編『民衆宗教史叢書29 大黒信仰』（一九九〇）、笠間良彦『大黒天信仰と俗信』（一九九三）、千代田区教育委員会編『続・江戸型山車のゆくえ』（一九九九）、『人形玩具研究』11（二〇〇〇）



飛騨匠頭



頭頸部墨書

（上の写真2点は『続・江戸型山車のゆくえ』より転載）

千代田区立四番町歴史民俗資料館蔵

## 企画展「ほれ話⑥」



### 日暮里延命院貝塚と考古学者・中谷治宇二郎

延命院貝塚と中谷治宇二郎 考古学者、中谷治宇二郎の存在を知ったのは、今から 10 年ほど前、平成 12 年頃に中谷氏の娘の桂子さんから連絡をいただいた時です。「父の残したカードの中に、延命院貝塚と見えるものがあります」というお話をでした。コピーを送つていただいたところ、日暮里延命院貝塚から出土した遺物を記録したカードということがわかりました。

中谷氏は明治 31 年（一八九八）、石川県で生まれ、兄は雪の結晶の研究者として知られる中谷吉郎で

す。大正 13 年（一九二四）、東京帝国大学理学部の選科の学生として入学し、数多くの考古学者を輩出した人類学教室で研究をしています。昭和 4 年（一九二九）には兄とともに、パリに留学し、帰国後は療養生活をしながら原稿執筆と研究を続けていました。35 年の短い生涯で、研究生生活わずか 12 年間という期間に数多くの論文を残しています。

調査カードの全貌 今回、「発掘！あらかわの遺跡展」（7 月 31 日～9 月 5 日開催）を行なうにあたり、頭の片隅にずっと残っていた、その調査カードについて改めて調べてみました。

現在は東京大学総合研究博物館に寄託され、調査カードの総数は 3 万点にのぼることがわかりました。また、総合研究博物館では、平成 17 年にこのコレクションの展示も開催されていました。

今回の展示では、中谷氏が記録した約 3 万点の調査カードのうち、荒川区内に関する 5 点を借用し、

研究史のコーナーに展示しました。内容は土偶 2 点、注口土器（縄文土器）3 点、いずれも他の研究者のスケッチ（記録）したものを持ち込んだり、本を切り貼りしたと思われるものです。

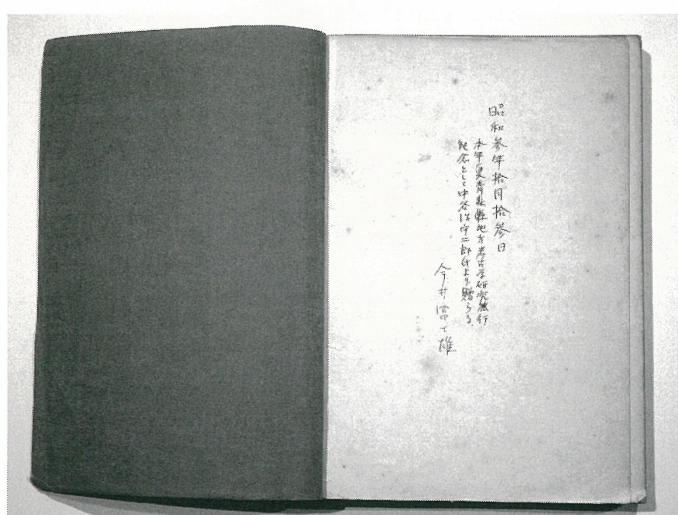
5 点の調査カードの元の記録は、東京帝国大学人類学教室の助手を務めた若林勝邦の土偶の報告（『東京人類学会雑誌』第六卷第 61 号）、同じく助手を務めた大野雲外の東京帝国大学の陳列資料である土器や土偶の記録、杉山壽栄男編著の『日本原始工芸概説』（昭和 3 年発行）、『日本原始工芸』（昭和 3 年発行）です。

『日本原始工芸概説』の大半は中谷氏の執筆によるという話もあります（『日本考古学選集 24 中谷治宇二郎集』）。また、中谷氏が執筆した注口土器の分類に関する論文「注口土器ノ分類ト其ノ地理的分布」の中で、「日暮里貝塚」の注口土器が 5 点あつたことを報告しています。このうち 2 点は中谷氏が実測したものといわれ、中谷氏は注口土器に関して、特に綿密に調べていたと思われます。

中谷治宇二郎の足跡 今回の展示の準備中に、調査カード以外にも中谷氏の足跡が見つかりました。前に出の『日本原始工芸概説』を古書店で見つけ購入したところ、その添書きに興味深い発見がありました。

拾月拾参日 本年夏青森県地方考古学研究旅行紀念として中谷治宇二郎氏より贈らる 今井富士雄と書き込みが見えます（写真）。今井富士雄は青森県出身で、後に成城大学文学部教授を務めた人物です。中谷氏は東京帝国大学の人類学教室にいた時期に東北地方に通つたそうです。書き込みの考古学研究旅行とは、昭和 3 年（一九二八）7 月 31 日から 8 月 5 日にかけて、今井富士雄らの案内の下、北津軽郡遺跡の調査を行なったことを指していると思われます。また、この書き込みからも、中谷が『日本原始

工芸概説』を執筆した一人であることを窺い知ることができます。自分も執筆に参加したからこそ、添書きをして手渡したのではないかと想像されるのです。



## 文学館通信 Vol.3

### 作家・吉村昭と 日暮里図書館



現在、荒川区は「(仮称)吉村昭記念文学館」の設置に向けて、準備を進めています。区立日暮里図書館2階に上がると「吉村昭コーナー」があり、ゆかりの品々が展示されていることを存知でしょうか。今回は吉村昭コーナーを紹介します。

**日暮里出身の作家** 吉村昭氏は昭和2年(一九二七)に、東京府北豊島郡日暮里町大字谷中本(現東日暮里六丁目)に生まれます。根岸の神愛幼稚園(現東日暮里五丁目)、市立第四日暮里尋常小学校(現ひぐらし小学校)に通い、私立東京開成中学校(現開成中学校)に進みます。つまり、日暮里は吉村氏の生誕地であり、少年時代のたくさんの思い出がつまつたゆかりの地なのです。

**日暮里図書館2階・吉村昭コーナー** 日暮里図書館はそんな吉村少年が生まれ育った旧家の向かいにあります。その2階にある吉村昭コーナーは、平成4年(一九九二)に吉村氏が荒川区区民栄誉賞を受賞された記念に作られました。平成22年1月にリニューアルしたばかりの注目スポットです。眼鏡・万年筆など遺愛品の他、直筆色紙、大佛次郎賞受賞作「天狗争乱」校正、ゲラ、テレビドラマ「龍嵐」台本など数々の貴重な品を常設展示しています。また、コーナーの一角では文学館調査担当のミニ展示を定期的に催しています。現在は、吉村昭原作「桜田門外ノ変」が10月16日に映画公開されることを記念した展示を開催中です。

**推薦著作本** 文学館調査担当では、毎月1冊吉村作品を推薦し、区内各図書館にある吉村氏の著作本棚で紹介しています。現在は、「作家・吉村昭と歴史



吉村昭コーナー

【問合せ】荒川区教育委員会事務局社会教育課  
文学館調査担当  
03-3802-3111(代)内線3353

### 日暮里図書館2階 吉村昭コーナー

ミニ展示:「作家・吉村昭と桜田門外ノ変」

開館時間:火~金曜日9時30分~19時30分  
12月28日(火)まで開催

土・日・祝日9時30分~17時

休館日:月曜日(祝日の場合は翌日)・第3木曜日・年末年始

住 所:荒川区東日暮里6-38-4

電話番号:03-3803-11645

交 通:JR山手線・常磐線・京浜東北線・京成

本線日暮里駅下車徒歩10分、JR常磐線

三河島駅下車徒歩10分、都バス大下り停  
留所下車徒歩7分

小説をテーマに「桜田門外ノ変」「彰義隊」「長英逃亡」「天狗争乱」を各館で紹介しています。郷里の作家・吉村昭を訪ねて最寄りの図書館に立ち寄られてみてはいかがでしょうか。

戦史・歴史小説で名高い吉村氏ですが、他にも医学・動物・家族をテーマにした小説や数々のエッセイ・紀行文を残されております。お気に入りの作品を見つけて読書にふけりつつ、秋の夜長をどうぞお楽しみ下さい。

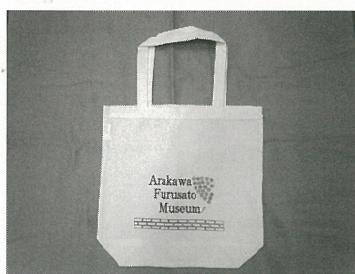
〈本川美輝〉

## 文化館でお買い物

### ●荒川ふるさと文化館Tシャツ

290円

あらかわの煉瓦壁と桜をモチーフにしたステキな柄のエコバッグです。史跡めぐりに最適です。



●荒川ふるさと文化館常設展示図録  
800円  
荒川ふるさと文化館の常設展示図録を再版しました。常設展示のあらかわの原始時代から昭和までの変遷を解説しています。

●荒川ふるさと文化館常設展示図録  
800円  
荒川ふるさと文化館展示室入口と区役所2階情報提供コーナーで販売しております。



●発掘!あらかわの遺跡展  
パズルde定規 160円  
あらかわ出土の縄文時代・弥生時代・古墳時代の土器の写真が18分割の楽しいスライドパズルになりました。15センチの定規付きです。

●荒川区の文化財(四)  
400円  
平成8~21年度に荒川区が登録・指定した文化財を紹介しています。



### ■訃報

●荒川区登録無形文化財(仏像・建築彫刻・昭和63年度登録)保持者の竹澤省二氏(75歳・東尾久)は去る平成22年5月22日に逝去されました。

●荒川区登録無形文化財(木製写真機・平成6年度登録)保持者の山本芳夫氏(94歳・東尾久)は去る平成22年5月31日に逝去了しました。  
謹んで、お双方のご冥福をお祈り申し上げます。